

米海軍岩国診療所見学を実施しました！

実施概要

- 1 趣 旨 臨床研修医が海外医療機関の診療状況等を学ぶ良い機会となることから、臨床研修の一環として実施
- 2 見学先 米海軍岩国診療所（岩国市三角町 米国海兵隊岩国基地内）
- 3 実施期間 令和6年11月19日（火）、12月3日（火）、12月10日（火）
- 4 参加者数 17名（1年次研修医：13名、2年次研修医：2名、歯科医師2名）

【米海軍岩国診療所見学 研修レポートから（抜粋）】

私は Flight medicine の見学をした。患者の中には、身体的に異常のない人も少なくなく、特に 18, 19 歳の青年が突然日本に派遣されるため、ホームシックになる例が多く、慣れない土地で過酷な訓練に励む軍人ならではの疾患で、メンタルケアの重要性を感じた。手術室や分娩室などは、どの部屋も日本の部屋より広く、手術室の中の機材は日本で使用されているものと同じなので、手術用語さえわかれば日本と同じようにオペできるのではないか思った。岩国診療所のフェローについて、アメリカ留学の話など聞き、今後のキャリアを考える上で大変参考になった。（2年次）

医療従事者として多文化的な環境で働く場合に求められる能力や適応力について考えさせられる経験でした。この経験を糧に、さらなるスキルアップに励み、将来的には多文化環境でも柔軟に対応できる医療従事者を目指したい。（2年次）

私は Flight Medicine（飛行機の乗務員を対象とする医療）の外来を見学した。まず、日本とアメリカの診察スタイルの違いに驚いた。そこでは患者ひとりひとりに割り当てられた部屋を医師が回っていくスタイルで、部屋の壁には耳鏡が設置されていた。医師はどんな患者に対しても問診にじっくりと時間をかけ、腰痛の患者に対してはカイロプラクティック（脊椎徒手療法）を施していた。これらの光景は、日本の医療現場ではまず見られないものであろう。我々が日頃「当たり前」と思っている医療の形態は、米国での「当たり前」とは異なるということを実感し、視野が広がった。また、特殊な視力検査を体験した。単純に視力を測るだけでなく、眼圧、色覚、立体視など、さまざまな検査が用意されていた。国を背負う軍隊のパイロットという性質上、非常に厳格な基準で検査しているということだった。海外に行ったことがない私にとっては、基地の中に身を置くこと自体が、非常に新鮮な経験となった。（1年次）

私は、発熱小児外来の見学をした。県病院と違って CT や MRI などの設備がなく、ほとんど問診と身体診察で、診断と方針を決めていることに驚いた。検査が少ない分、待ち時間が少なく、問診を長くとり、患者と話すことを大切に、食事や睡眠などの生活により深く介入・アドバイスが行われていた。救急外来で発熱患者が来たらすぐに CT 撮影が頭の中でよぎる普段の自分を顧みるきっかけになった。1年あたり 200 弱の経膈分娩・帝王切開が行われ、産科の医師が常駐し、最先端の手術器具がそろった大きな手術室で帝王切開が頻繁に行われていた。数ある診療科の中でまず設備を充実させているのは産科であることは家族との時間を特に大切にするアメリカならではの発想なのではないかと感じた。陣痛室と分娩室が一体化した病室で、室内はとても広く、家族が生活するには十分な設備が整っており、家族で長期間滞在することも可能であると感じた。日本人医師の立花先生は岩国診療所内で総合病院に搬送すべき症例が出た際、総合病院への搬送交渉および搬送中の監督を行い、英語が上手で、笑顔の絶えない人で、診療所の先生方やスタッフの方から信頼されていると感じた。診療・治療することだけが医療ではなく、医療環境を整えることも医者の仕事の一つであると感じた。（1年次）

私は、小児科の診療とPA(Physician Assistant)の診療を見学した。小児科では、まず医療面接を行い、その後身体診察を行う。医療面接の内容は、赤ちゃんの食事、排泄、気になる症状、体重についてなど、日本の診療と似た印象でした。また、その後の身体診察では聴診、股関節の観察に加え、眼、耳の診察も行ってた。診察の順番は顔回りを最後にするなど、日本と同様だった。産後の入院日数は短く、中には1日で退院される患者もあり、日本との違いを感じた。PAが活躍され、医師の診療と同様、医療面接、身体診察を行っていた。日本では耳鼻科の診察は専門医が行う印象でしたが、医療従事者がより広い分野の診察を一人で行っていた。また、commonな疾患の違いが印象的でした。当院では、高齢者の患者が多く、誤嚥性肺炎など高齢者に多い疾患がcommonとなりがちだが、米軍基地では、軍人とその家族が患者となるため年齢層が違い、誤嚥性肺炎などは少なく、犬咬傷が多いということだった。さらに、医師のキャリアのうちの1つの選択肢を新たに学ぶことができた。米海軍岩国診療所は、米国で働きたい日本人医師の1つの窓口となっていて、日本のみでキャリアを積む1つの選択肢ではある。海外にも視点を向ける良いきっかけとなった。自ら活躍の場を広げられる医師となるため、さらなる診療能力、言語能力、文化理解の向上を目指したい。(1年次)

今回の見学は自分が歯科医師として視野を広げるためのよい機会だった。特に印象に残ったのは最新の医療設備とそれを扱うスタッフの高い専門性である。診療所では最新の技術を駆使した治療法や患者の治療にどのように貢献しているかを学ぶことができた。特に歯科では日本で自費治療にあたる材料を当たり前のように使用しており、より質の高い治療を行っているように思った。インプラント治療やジルコニア治療はスキャナーを通してカナダにあるラボとやり取りを行っていた。診療室内にも歯科技工士は3名いるが、他のラボともやり取りをしており、より幅広い症例に対応できる工夫がされていた。また患者さんが不快な思いをしないような工夫がいくつもあった。具体的には、バキュームによる吸引です。通常1本のバキュームで唾液や治療中に出る水を吸うところを、2本使用し、1本は治療中の吸引、もう1本は喉の奥を吸引できるような細長いタイプを使用していた。そうすることで、患者が自身で水を口腔内に溜めておらずに済み、ストレスを軽減させることができると分かった。今回見学したところは補綴治療の専門だったが、他にも歯内治療、口腔外科など分業し、専門性が高いと感じた。一つの分野に複数の歯科医師が所属しており、お互いが治療内容を共有し、患者中心の治療を大切にしつつ異文化ならではの効率的にチームワークを発揮されている様子や、異文化の医療現場で得た知見を今後の診療に取り入れていきたい。(歯科医師)



米海軍岩国診療所での治療や、治療以外での異文化を体験することができた。矯正治療では上顎拡大装置作製のための印象採得を見学した。技工室では、日本人の技工士さんが設備を紹介してくれ、補綴の先生にはインプラントオーバーデンチャーにて咬合再建を行った症例をスライドにて説明をうけた。口腔外科では、両側上下顎智歯の抜歯を見学した。先生は安全面を第一に考え、抜歯部位は介助者と一緒に指差しで確認し、部位間違いがおこらないように、機械結びで縫合を行う際には自分で針を持ち、介助者や患者に針が当たらないように、安全な医療を提供する取り組みがなされていた。米海軍岩国診療所の歯科では矯正の治療においても、う蝕があれば保存の先生に、補綴前の抜歯が必要であれば口腔外科の先生に紹介するなど、それぞれの診療科の専門の先生が在籍されているので、より専門性の高い治療が行われていた。(歯科医師)

家庭医のドクターの診療を見学した。非常に幅広い疾患を診られていたことが印象に残った。基地内の診療所という特殊な環境で、医療資源も限られ、ある程度限られた疾患のみ診られていると想像していたが、小児の中耳炎から、指定難病であるエーラス・ダンロス症候群の女性の訴えまで幅広く診られており驚いた。私は地域枠であり、地域の限られた医療資源の中で幅広い訴えに応えられる医師になりたいと考えているため、通ずるものがあり非常に勉強になった。また、日本のレジデントの先生方は、留学を考えているとのことでした。これまで私は留学について考えたこともなかったが、先生方のお話を聞き、他の医療スタッフと英語でコミュニケーションをとられている様子を拝見し、少しイメージが湧き興味が出てきた。(1年次)

外来を見学した。米軍診療所では、主に海軍兵士とその家族を診察している。診療を見学し驚いた点は、メディカルスタッフ見習いの兵士が問診票を要約して伝え、それを聞いた先生が疾患の鑑別をいくつか挙げ、診察室に向かい診察をするという流れであった。まずは他愛もない会話で患者と打ち解け後に診察をされていた。その診察にて、緊急的な疾患を除外した上でOsteopathic techniques という治療をされ、家庭医や総合診療医、軍に従事される医師はそのような治療法も習得されるということでした。また院内急変コード・ブルーの練習も行われ、院内急変を想定してCPAを行う練習に参加した。院内放送が流れ、現場に集まると医師、看護師、事務、清掃員など病院内で働くあらゆる職種の人がCPAを習得され初動の速さに驚いた。また担架を持ってくる人や、連絡を行う人など、決められていないのに各自が自分で動き我々も見習うべき点が多かった。産婦人科病棟では、病室内はすでに分娩室と同じような状態で、ベッドの横に笑気麻酔や新生児ウォーマーも設置されていた。病室は3部屋で、帝王切開術も行っていた。(1年次)

1番の印象は、問診をメインで行い、会話の時間が長かった。症状などを丁寧に聞き、患者と目を合わせてコミュニケーションをとることで患者も自分の症状や生活上での困ることを素直に話せていた。院内急変時の訓練日で、英語版でのBLSを体験することができた。(1年次)

日本での身体所見の取り方と米軍での身体所見の取り方で大きな差があることを感じた。米軍基地では耳鏡を多用し、身体診察より問診のウエイトが大きく、また、血液検査は減多に行わず、院内にはレントゲンしかなく、基地内での医療はプライマリケアを中心としたものでした。(1年次)



軍人を診察するブースとその家族を診察するブースが分けられており、私は軍人の方を診察する先生について見学した。総合医のような役割をされ、膝の術後創部の診察から髭剃りによる皮膚炎までも幅広い領域の診察をされ驚いた。血液検査や心電図などの検査や問診はメディカルアシスタントの方がされ、医師は、診察室での詳しい問診と身体診察をされていた。軍人は基本的に健康な方が多く、重篤な疾患を抱える人は少ないとのことでした。岩国診療所にはCTが設置されておらず、CTによる精査が必要な病態であれば、近隣の岩国医療センターに搬送され、地域との連携が重要であると感じた。診療所での手術は、基本的にハイリスクでない帝王切開術や子宮内搔爬術とのことでしたが、かなり広い手術室があり、インファントウォーマーなどの設備が充実していた。転院搬送の機会も多く、搬送のための設備も多かった。(1年次)

まず驚いたのは、救急初療室が個室であったことです。他の診察室も同様に個室であり、診察の形式が当院とは大きく異なりました。岩国診療所では、患者が先に診察室に入っており、そこに医師が向かうという点が大きく違いました。アメリカではこの形式の診察室が多いと知り、プライベートへの配慮に文化的な違いを感じました。外来診療見学では、軍人の診療を見学しました。患者の身体的な症状から家庭でのストレスまで、あらゆることを聴取され、全人的医療とはこのことであるとと感じました。また、様々な症状は、軍人という職業には特に大きな問題になるため、診断書の作成も重要であると教わりました。診療所にはCTや入院施設がなく、思っていたよりも制限された環境であり、そのため、基地外の病院と連携して診療が行われていました。先生は基地内の住民に対して、肥満改善の目的にジムでヨガ教室をされ、健康増進のための公衆衛生の活動もされていたのが印象的でした。私も将来、地域の健康増進のために何か活動したいと思った。産科の見学では、継続しての入院ができないため、基地外の病院に搬送することも多いと聞いた。新生児の搬送のために、県病院とのドクターヘリ運用が計画されていた。診療所内には日本各地の風景が飾られており、海外スタッフの方が、「みんな日本が好きだからね」と言われて、嬉しかった。米海軍岩国診療所は、基地内の軍人と家族の健康を守り、非常に重要な役割を担っていることを実感した。(1年次)

外来を見学した。医師の専門は家庭医で、問診した方の話から、大体的見当をつけた後、診察室に入り患者の訴えを丁寧に聞き診察していた。米軍の方は若くて筋肉や腱の痛みを訴える方が多く、適切な理学療法を処方され、日本との違いを感じた。(1年次)

日本での診療との違いを感じたのは、医師が患者のところへ自ら足を運ぶところです。日本では大抵は多くの患者が待合室に待っており医師がいる診察室に順番に呼び込んで診察するのに対して、診療所では予め患者一人一人に一部屋の診察スペースが与えられ、そこに医師が自ら赴き診療を始めるというスタイルでした。今までこのようなスタイルの診療を見たことがなかったため新鮮でした。ただ日本の診察室のように全ての部屋にパソコンが設置されているわけではないためその場で過去の診療情報を参照することが難しいと思った。実際にそういった場合にはどうするのかという疑問が浮かぶと同時に、問診を始める前に患者の情報をしっかりと頭の中に入れておかなければならないというプレッシャーもあるのではないかと推察した。診療所で行える検査には限りがあり血液検査のほか超音波やレントゲンなどに限られているがその分、問診や身体診察に対して非常に重きを置いていることが印象に残った。患者の症状だけでなくバックグラウンドにも言及して問診している場面を見学でき、今後の自分たちの診療にも活かすことができるのではないかと感じた。(1年次)

私は軍人の外来の見学をした。消化器系疾患、整形外科的疾患、脳神経疾患等、一人の医師が診療科の区別なく幅広くみていた。私たちが救急外来で診療する際にはCT検査等をすぐに撮れる環境にいるが、基地の診療所は、CTやMRI等の検査は外部で行うため、限られた検査のみしか行うことが出来ない状態であった。そのため、医師が患者に丁寧に問診を行っていた。普段診療を行う際に、問診をここまで丁寧に行うことをしていなかったように感じ、普段の診療で患者から必要な情報を聞き出すことの重要性を改めて感じた。治療に関して、普段診療する際に薬剤療法を中心に治療を進めることが多いが、岩国基地診療所では、薬物療法はもちろん、心理療法や食事の管理等、他の面からもアプローチすることが日本の病院より多い印象を持った。(1年次)

私は主に軍の方を診察する所を見学した。蕁麻疹、発熱、疲労骨折や無月経など様々な疾患を診られて、問診と身体診察で判断し処方されていた。現時点で原因がはっきりとしない場合にも、時間を味方につけて治療的診断をされていた。他にも医師ではない助手のような方が、あらかじめ患者の主訴や現病歴を聴取して医師に報告するシステムや音声入力でカルテ記載ができ効率的に診療が進むような仕組みがあった。(1年次)

